

津久見市 Well-Being アンケート 最終調査結果

1. 調査概要

項 目	内 容
調 査 目 的	・ Well-Being を構成する 24 の因子について、市民の主観的な考え方を把握し、客観的評価と比較・分析することにより、次期総合計画・総合戦略策定に利用する。
調 査 時 期	令和 7 年 4 月 1 日～4 月 15 日
調 査 対 象 者	津久見市民（18 歳以上） に対して回答を呼びかけ
回 収 数	141 件
調 査 方 法	・ デジタル庁の「自治体アンケート調査支援システム」により実施（Web 調査） ・ 広報紙、公式 LINE・X・Facebook アカウント等を利用し、アンケート調査の Web サイトを案内
主な調査項目	・ 地域における幸福度・生活満足度に関する設問（4 問） ・ 「生活環境」（16 因子・27 問）、「地域の人間関係」（2 因子・10 問）、「自分らしい生き方」（6 因子・9 問）の各設問を 5 段階で回答（あてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、ややあてはまらない、あてはまらない） （設問例） ➢ 暮らしている地域は、医療機関が充実している ➢ 私は、この町内に対して愛着を持っている ➢ 私は精神的／身体的に健康な状態である など

2. 調査結果

地域幸福度 Well-Being 指標のダッシュボード※に掲載された、主観データおよび客観データの両因子の値を俯瞰し、津久見市における市民の幸福感の特徴を捉えた。

※ <https://well-being.digital.go.jp/dashboard/>

2.1. 属性

- ・ 有効回答者数は 141 人であり、年代別では 40 代～60 代からの回答が多く、性別は男性・女性ほぼ同程度から回答を得た。

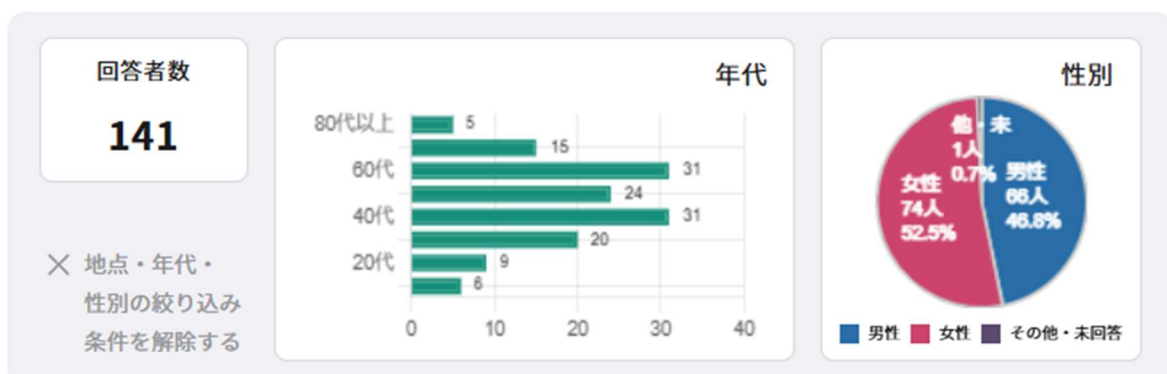


図 2-1 2025 年度（令和 7 年度）回答者属性

2.2. 幸福度・生活満足度

「幸福度」「生活満足度」「町内の幸福度」「周りも楽しい」に関する結果を以下に示す。

(1) 幸福度（現在、あなたはどの程度幸せですか？）

幸福度（現在、あなたはどの程度幸せですか？）の平均値は6.9であった。幸福度の全国平均（2024年度）は6.49であり、全国平均より幸福と感じている人が多い。

年代別では、全国平均では30代～40代の働き盛りの世代が低く、60代以降が高くなる傾向にある。津久見市でも全国傾向と同様に30～40代が最も低く6.6であった。10～20代の平均値7.6、50～60代の平均値7.0で、全体の平均値6.9を上回り幸福度が比較的高い世代であると考えられる。

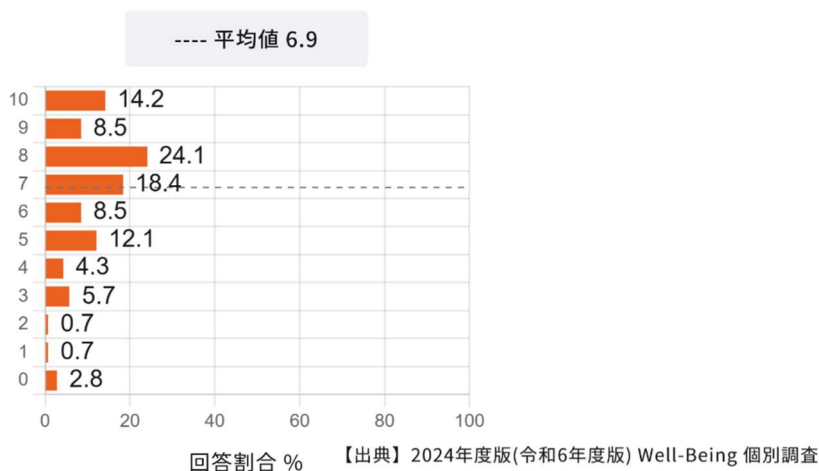


図 2-2 幸福度（全体）

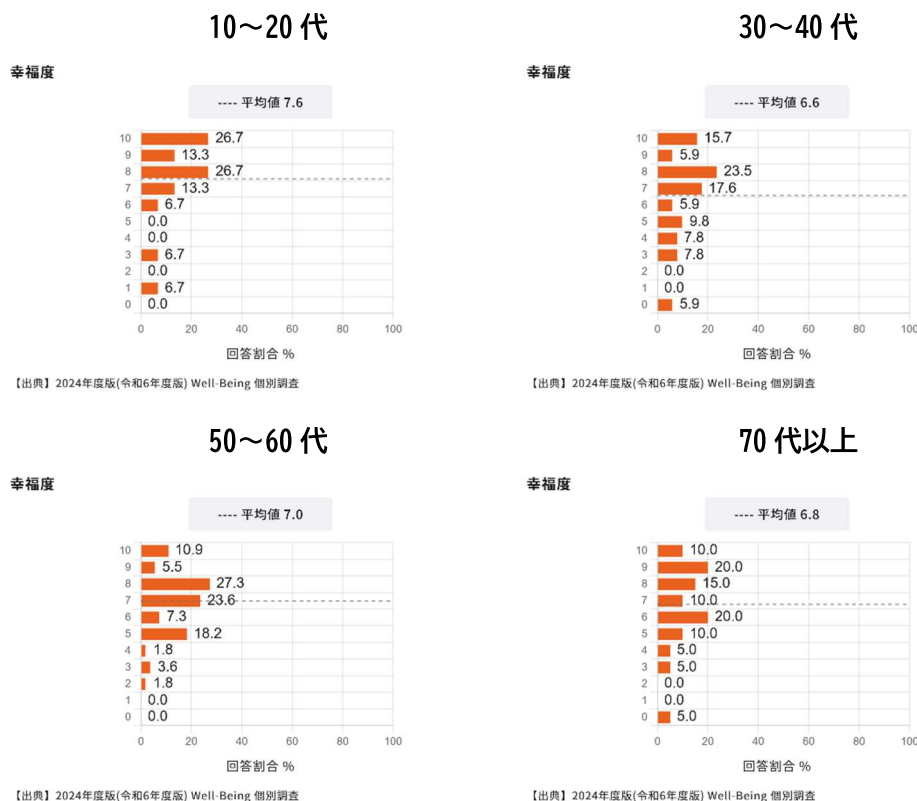


図 2-3 年代別の幸福度

(2) 生活満足度（住んでいる地域の暮らしに満足していますか？）

生活満足度（住んでいる地域の暮らしに満足していますか？）の平均値は5.7であった。生活満足度の全国平均（2024年度）は6.48であり、全国平均と比較すると、生活満足度はやや低めとなった。

年代別では、全国平均では30代～40代が低く、60代以降が高くなる傾向にあるが、津久見市でも同様の傾向がみられ、30～40代が4.9と生活満足度が低い結果となった。

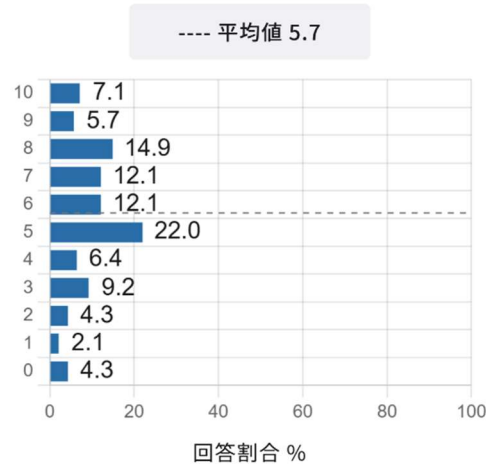


図 2-4 生活満足度（全体）

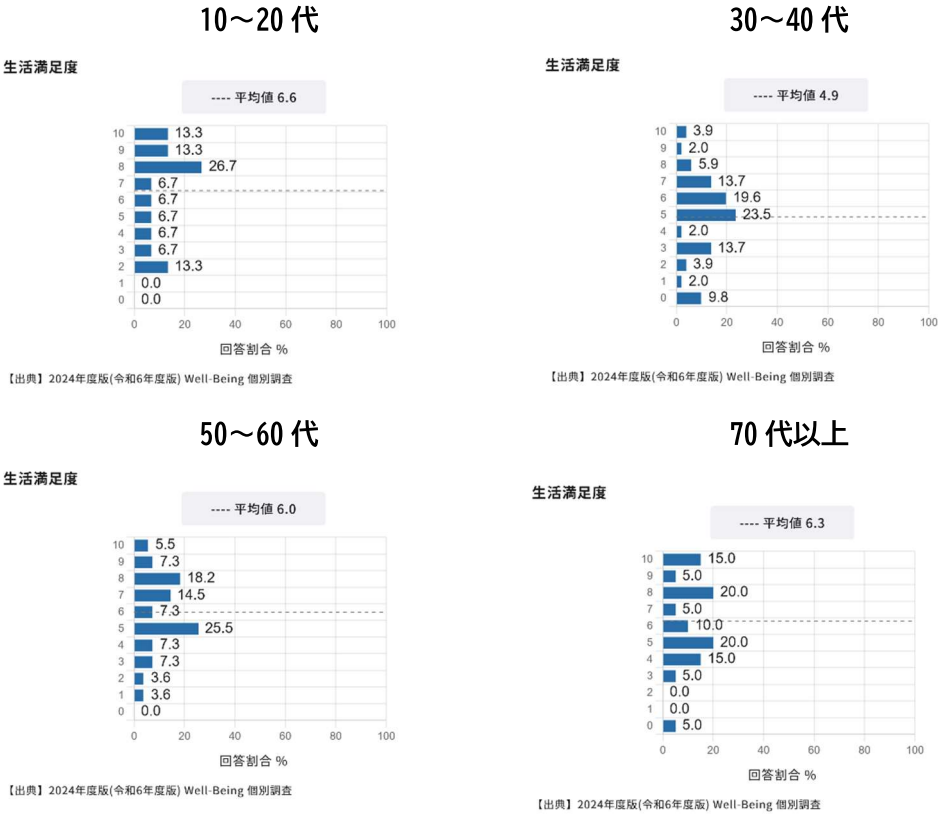


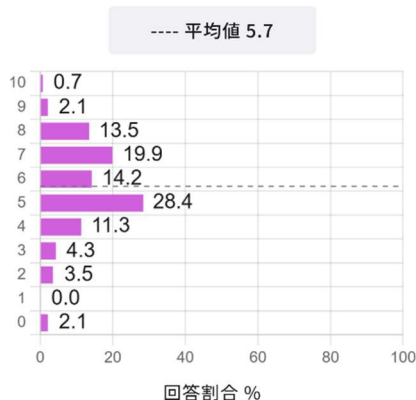
図 2-5 年代別の生活満足度

(3) 町内の幸福度（あなたの町内（集落）の人々は、どのくらい幸せだと思いますか？）

町内の幸福度は、平均値 5.7 であり全国平均（2024 年度）の 6.3 を下回る結果となった。

年代別では、全国平均では男女別・年代別の違いはそれほど大きくない傾向となっているが、津久見市においては、幸福度・生活満足度と同様、30～40 代が 5.2 と最も低い結果となっている。

町内の幸福度

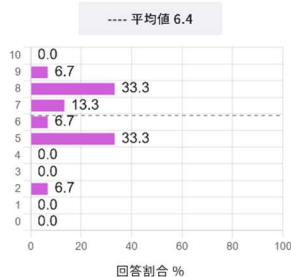


【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-6 町内の幸福度

10～20 代

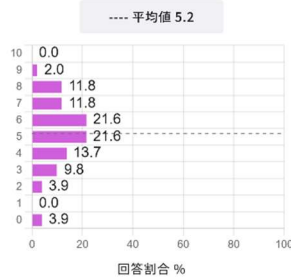
町内の幸福度



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

30～40 代

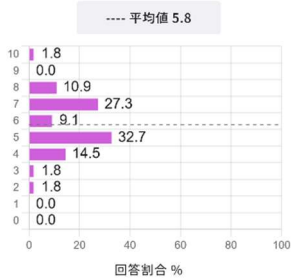
町内の幸福度



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

50～60 代

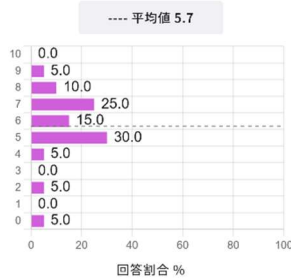
町内の幸福度



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

70 代以上

町内の幸福度



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-7 年代別の町内の幸福度

(4) 周りも楽しい（自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思う）

自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると思うかどうかを尋ねた本設問では、平均値が3.1となり、全国平均（2024年度）の3.2をやや下回った。

年代別では、全国平均では男女別・年代別の違いはそれほど大きくない傾向となっているが、津久見市においては、幸福度・生活満足度と同様、30～40代が3.0と最も低い結果となっている。

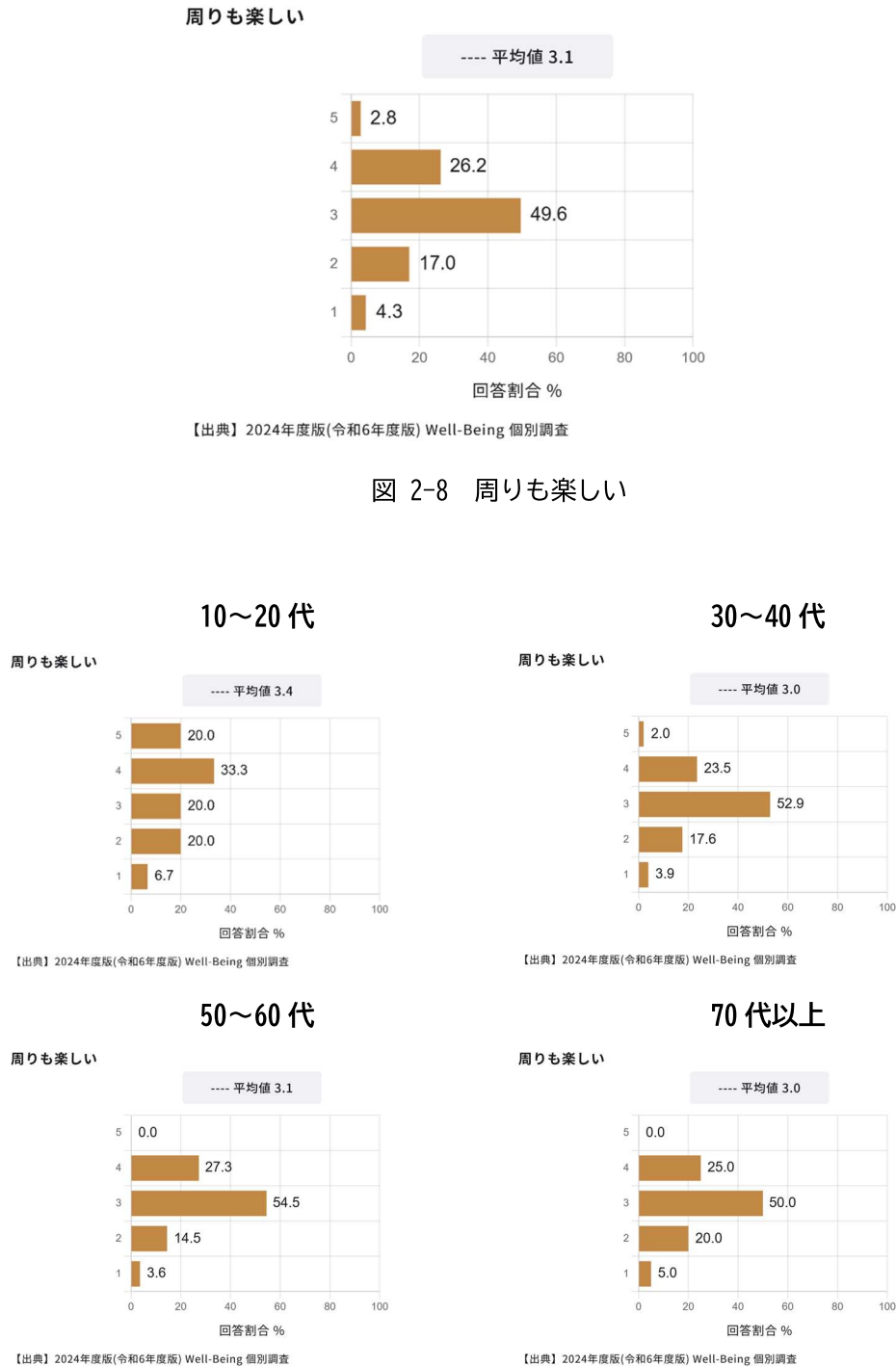


図 2-9 年代別の周りも楽しい

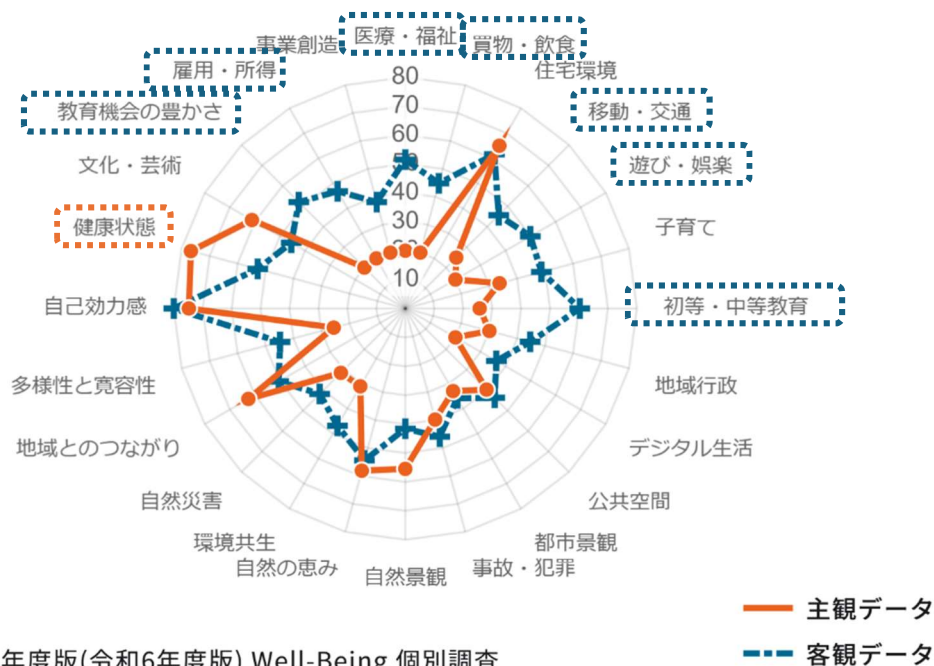
2.3. カテゴリー別（レーダーチャート・散布図）

カテゴリー別において、「初等・中等教育」「教育機会の豊かさ」「医療・福祉」「遊び・娯楽」「雇用・所得」「買物・飲食」「移動・交通」の7項目で主観データが客観データを大きく下回った（差分 20 以上）。客観データは偏差値 44.8～60.3 の範囲にあり、全国的に見ても特段劣る状況ではないが、市民が現状に対してさらなる改善を望んでいる可能性がうかがえる。

一方、「健康状態」は主観データが客観データを大きく上回る結果となった（差分 20 以上）。市民の方々が、客観的にみた現況以上に、現状に満足しているといえる。

なお、地域幸福度(Well-Being)指標では、偏差値化した主観指標・客観指標を使用している。偏差値化の狙いは、まちの特徴をグラフの凹凸の形で読み取れるようにすることである。多くの人に馴染み深い「偏差値」という言葉が、「競争」や「ランキング」を想起させがちだが、自治体同士の過度な比較は避け、自身のまちの特徴を読み取ることが主目的である。

- ✓ 主観指標：人口 10 万人以上かつ回答数 100 以上の自治体の数値をベースとした偏差値
(人口 10 万人未満または回答数 100 未満の自治体は、上記の都市の平均値と標準偏差を適用して偏差値を算出)
- ✓ 客観指標：人口 10 万人以上の自治体の数値をベースとした偏差値
(人口 10 万人未満の自治体は、上記の都市の平均値と標準偏差を適用して偏差値を算出)

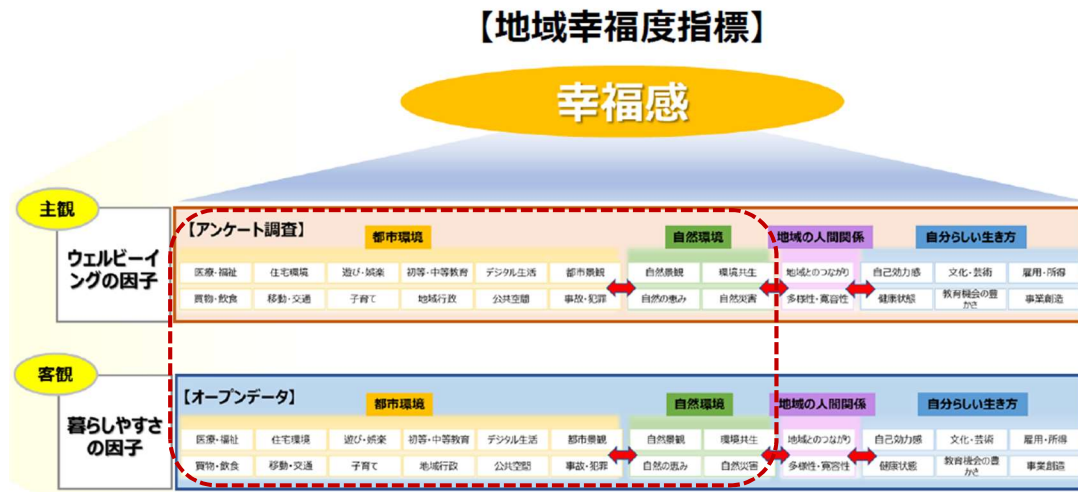


【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-10 カテゴリー別レーダーチャート

2.4. 生活環境

生活環境のカテゴリーは、下図の赤枠に示す「都市環境」および「自然環境」の16カテゴリーである。



【出典】地域幸福度（Well-Being）指標活用ガイドブック（2024年12月 デジタル庁・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 2-11 生活環境のカテゴリー

(1) 客観データ（オープンデータ）

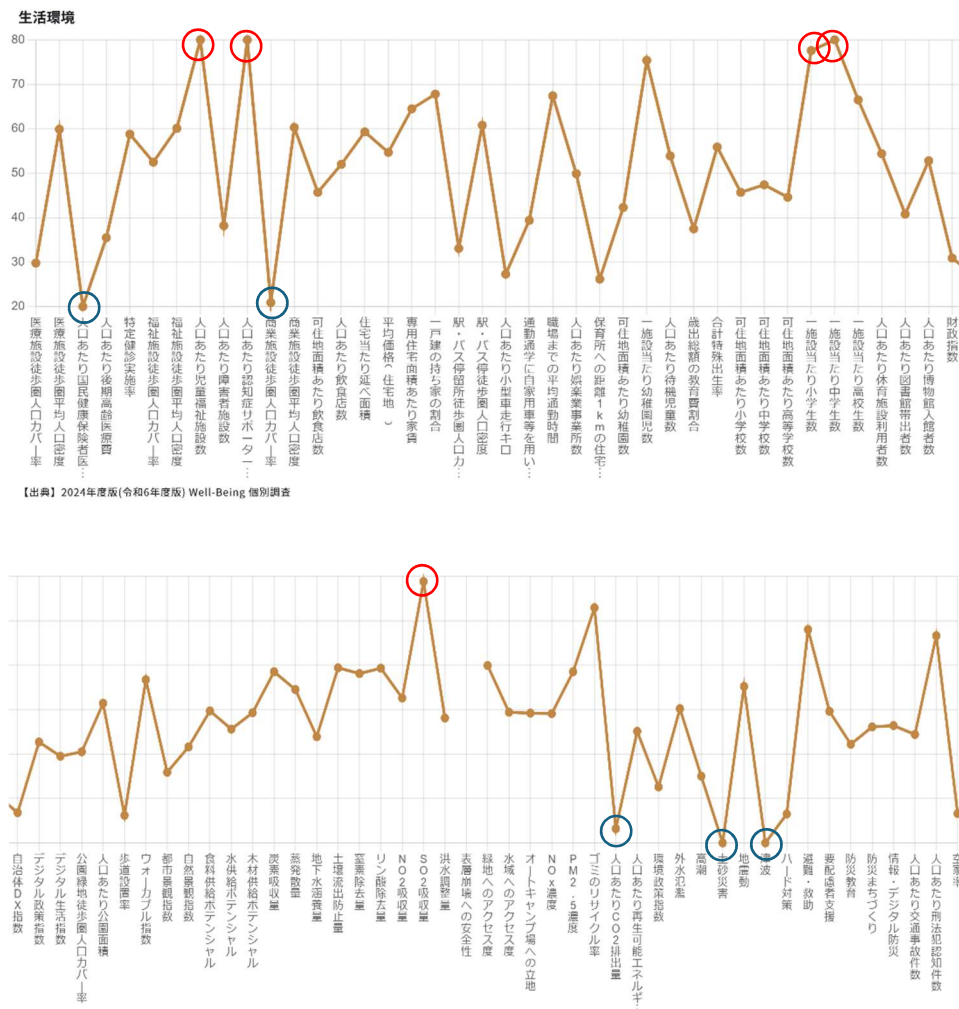


図 2-12 生活環境 客観データ

表 2-1 生活環境>客観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値	指標	偏差値
1	人口あたり児童福祉施設数 (医療・福祉)	80.0	人口あたり国民健康保険者医療費 (医療・福祉)	20.0
2	人口あたり認知症サポーター メイト・サポーター数(医療・福祉)	80.0	土砂災害危険度(自然災害)	20.0
3	一施設当たり中学生数(初等・中等教育)	80.0	津波危険度(自然災害)	20.0
4	S02 吸収量(自然の恵み)	78.8	商業施設徒歩圏人口カバー率 (買物・飲食)	20.9
5	一施設当たり小学生数(初等・中等教育)	77.6	人口あたり CO2 排出量(環境共生)	23.2

(2) 主観データ (アンケート)

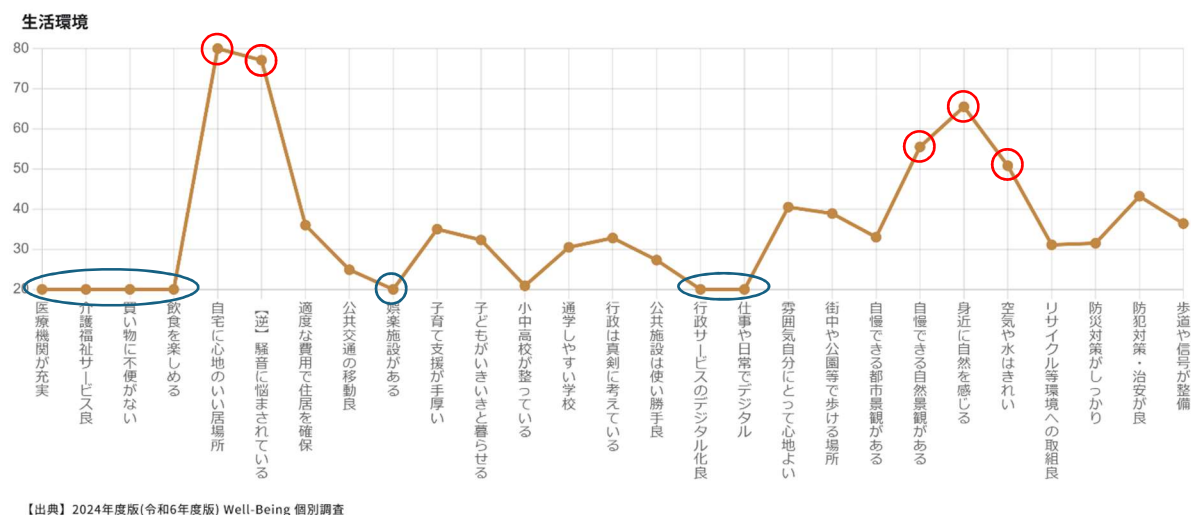


図 2-13 生活環境 主観データ

表 2-2 生活環境>主観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値 (実数)	指標	偏差値 (実数)
1	自宅には、心地のいい居場所がある(住宅環境)	80.0 (4.0)	医療機関が充実している(医療・福祉)	20.0 (2.6)
2	【逆】自宅の周辺では、騒音に悩まされている(住宅環境)	77.1 (4.0)	介護・福祉施設のサービスが受けやすい(医療・福祉)	20.0 (2.8)
3	身近に自然を感じることができる(自然の恵み)	65.5 (3.9)	日常の買い物に全く不便がない(買物・飲食)	20.0 (2.6)

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値 (実数)	指標	偏差値 (実数)
4	自慢できる自然景観がある (自然景観)	55.5 (3.3)	飲食を楽しめる場所が充実 している(買物・飲食)	20.0 (2.0)
5	暮らしている地域の空気や 水は澄んでいてきれいだと 感じる(自然の恵み)	50.8 (3.3)	楽しい時間を過ごせる娯楽 施設がある(遊び・娯楽)	20.0 (1.5)
6			行政サービスのデジタル化 が進んでいる(デジタル生 活)	20.0 (2.2)
7			仕事や日常生活の場でデジ タル化が進んでいる(デジタ ル生活)	20.0 (2.1)

(3) 主観・客観データ分析

表 2-3 生活環境>主観・客観データ分析

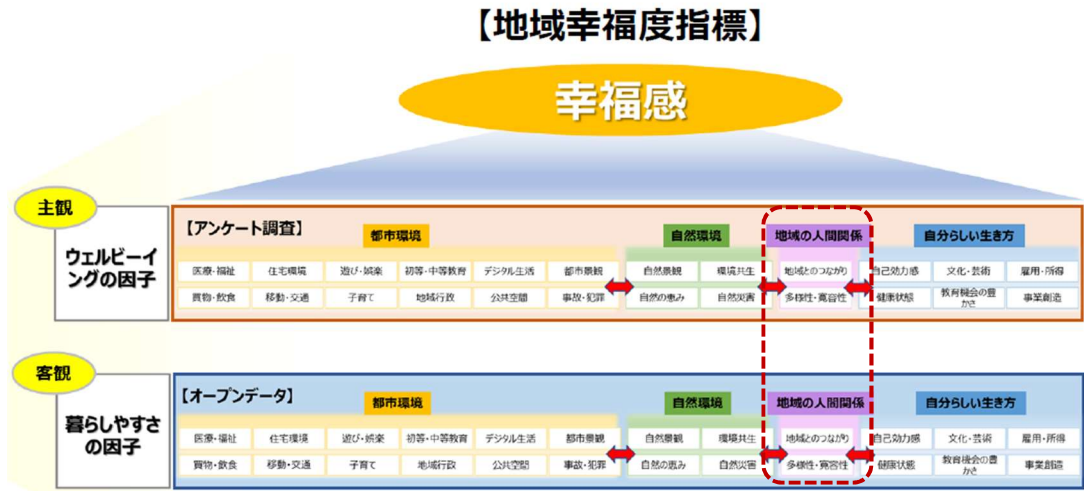
No	因子	分析
1	医療・福祉	【主観】「医療機関が充実している」「介護・福祉施設のサービスが受けやすい」は共に偏差値 20.0 と最も低く、市民は医療・福祉の充実度に不満を感じている。 【客観】「医療施設徒歩圏人口カバー率」(29.8)、「人口あたり国民健康保険者医療費」(20.0) が低く、医療アクセスや健康状態に課題がある。一方、「人口あたり児童福祉施設数」(80.0)、「人口あたり認知症サポーター・サポーター数」(80.0) は非常に高く、福祉サービスの提供体制は整っている面もある。(「医療施設徒歩圏平均人口密度」は(59.9) 高いが、政策介入効果の測定に不向きとして 2025 年度客観指標より削除された)
2	買物・飲食	【主観】「日常の買い物に全く不便がない」「飲食を楽しめる場所が充実している」は共に偏差値 20.0 と最も低く、市民の満足度は非常に低い。 【客観】「商業施設徒歩圏人口カバー率」(20.9) も低く、市民の実感を裏付ける結果となっている。
3	住宅環境	【主観】「自宅には、心地のいい居場所がある」(80.0)、「【逆】自宅の近辺では、騒音に悩まされている(→騒音に悩まされていない 77.1) は高く、住環境への満足度は高い。一方、「適度な費用で住居を確保できる」(36.0) は低く、住宅費用に課題がある。 【客観】「平均価格(住宅地)」(54.7)、「専用住宅 1m² あたり家賃」(64.5) は全国平均より高め、市民の実感とのギャップが見られる。
4	移動・交通	【主観】「公共交通機関で好きな時に好きなところへ移動ができる」(24.9) は非常に低く、移動の自由度に不満がある。 【客観】「駅またはバス停留所徒歩圏人口カバー率」(33.1)、「一人当たり小型車走行キロ」(27.3)、「通勤通学に自家用車・オートバイ・タクシー

No	因子	分析
		を用いない割合」(39.4)が低く、公共交通機関へのアクセスが不十分で自家用車依存が強い。一方、「職場までの平均通勤時間」(67.4)は高く、通勤時間の負担は少ない。 (「駅およびバス停徒歩圏人口密度」は(60.8)高いが、政策介入効果の測定に不向きとして2025年度客観指標より削除された)
5	遊び・娯楽	【主観】「楽しい時間を過ごせる娯楽施設がある」(20.0)は最も低く、市民の娯楽環境に対する満足度は低く、改善の余地がある。 【客観】「人口あたり娯楽業事業者数」(49.9)は標準的で、施設数は一定程度あるが、市民の期待とのギャップがある可能性がある。
6	子育て	【主観】「子育て支援・補助が手厚い」(35.3)、「子どもたちがいきいきと暮らせる」(32.3)は低く、子育て環境への満足度は低い。 【客観】「合計特殊出生率」(55.9)は標準よりやや高いが、「最寄りの保育所までの距離が1km未満の住宅の割合」(26.2)、「可住地面積100km²あたり幼稚園数」(42.3)は低く、施設アクセスに課題がある。
7	初等・中等教育	【主観】「教育環境(小中高校)が整っている」(20.9)、「通学しやすい場所に学校がある」(30.5)は低く、教育環境への不満がある。 【客観】「可住地面積100km²あたり小学校・中学校・高等学校数」(45.7・47.4・44.6)は標準よりやや低く、施設数に課題がある。(一施設当たり小学生・中学生・高校生の数は高いが、政策介入効果の測定に不向きとして2025年度客観指標より削除された)
8	地域行政	【主観】「地域の行政は、地域のことを真剣に考えている」(32.8)、「公共施設は使い勝手良く便利である」(27.3)は低く、行政サービスへの満足度は低い。 【客観】公共サービスが充実しているかを示す「人口あたり体育施設利用者数」(54.4)、「人口あたり図書館帯出者数」(40.8)、「人口あたり博物館入館者数」(52.8)は標準水準であるが、公共サービスは持続可能かを示す「財政指数」(30.9)と低く、持続可能性に課題がある。(財政力指数・経常収支比率・実質公債費比率・将来負担比率)
9	デジタル生活	【主観】「行政サービスのデジタル化が進んでいる」「仕事や日常生活の場でデジタルサービスを利用しやすい」は共に20.0と非常に低く、デジタル環境への満足度は低い。 【客観】「自治体DX指数」(26.8)、「デジタル政策指数」(42.7)、「デジタル生活指数」(39.5)も低く、行政・生活のデジタル化が十分に進んでいない。
10	公共空間	【主観】「地域の雰囲気は、自分にとって心地よい」(40.5)、「まちなか、公園、川沿い等で心地よく歩ける場所がある」(38.9)は標準よりやや低い。 【客観】「公園緑地徒歩圏人口カバー率」(40.5)はやや低く、徒歩圏内に公園や緑地が十分に整備されていない可能性がある。一方、「人口あたり公園面積」(51.4)は標準的であり、混雑の少ない公共空間が一定程度確保されていると考えられる。 「歩道設置率」(26.2)は低い、「ウォーカブル指数」(56.7)は標準以

No	因子	分析
		上であり、歩きたくなる街並みの形成に向けては、さらなる整備が求められる。(ウォーカブル推進都市・ウォーカブル推進都市のうち滞在快適性等向上区域を設定している自治体に該当。自転車活用推進計画は未策定。)
11	都市景観	【主観】の「自慢できる都市景観がある」は 33.3、【客観】の「都市景観指数」も 35.9 と、主観・客観ともに低い水準にある。(「都市景観大賞」受賞の市区町村、景観条例の有無、景観重要建造物の有無、景観協定の有無))
12	自然景観	【主観】の「自慢できる自然景観がある」は 55.5 と高い方に位置している。【客観】の「自然景観指数」は 2024 年度は 41.6 であったが、指数内の内訳が追加された 2025 年度では 67.4 と上昇しており、より市民の実感に近づいた結果となった。(2024 年度まで：国立・国定公園の有無、「美しい日本のむら景観百選一覧」、景観重要樹木の有無、重要文化的景観／2025 年度より追加：美しい日本の歴史的風土 100 選、歴史の道百選、重要文化的景観、ユネスコ・ジオパーク、日本の 100 名山、自然共生サイト (30by30) (環境省))
13	自然の恵み	【主観】の「身近に自然を感じることができる (65.5)」、「暮らしている地域の空気や水は澄んでいてきれいだと感じる」(50.8) は高い水準にある。【客観】は「食料供給ポテンシャル」から「オートキャンプ場への立地確立」まで多数の指標が設定されているが、総じて標準前後の水準にあり、特に「SO2 吸収量」(78.8) が非常に高い水準にある。
14	環境共生	【主観】の「リサイクルや再生可能エネルギー活用等、環境への取組みが盛んである」は 31.1 と低い水準にある。 【客観】の地球環境への負荷を示す「ゴミのリサイクル率」(2024：72.9→2025：48.2)、「人口あたり CO2 排出量」(2024：23.2→2025：40.8)、「人口あたり再生可能エネルギー (2024：45.1→2025：66.1) と、通常経年変化が大きくはない客観データの振れ幅が大きいため、データの出典の確認や、今後も継続的に経年変化を追っていくことが必要である。
15	自然災害	【客観】の自然災害のリスクの高さを表す「土砂災害危険度」、「津波危険度」がいずれも偏差値 20.0 と非常に低い。【主観】の「暮らしている地域では、防災対策がしっかりしている。」(31.5) も低い水準にあるが、【客観】の防災への取組みや備えの充実度を示す「避難・救助」指標では 68.0 と高い水準を示しており、市民への周知の必要性も想定される。
16	事故・犯罪	【客観】の「人口あたり刑法犯認知件数」(66.6) は全国標準より高い水準にあるが、「人口あたり交通事故件数」(44.4) とやや低い水準にある。 【主観】においても、「防犯対策 (交番・街燈・防犯カメラ・住民の見守り等) が整っており、治安がよい」(43.2)、「歩道や信号が整備されていて安心である」(36.4) と、犯罪より交通への不安が大きい。

2.5. 地域の人間関係

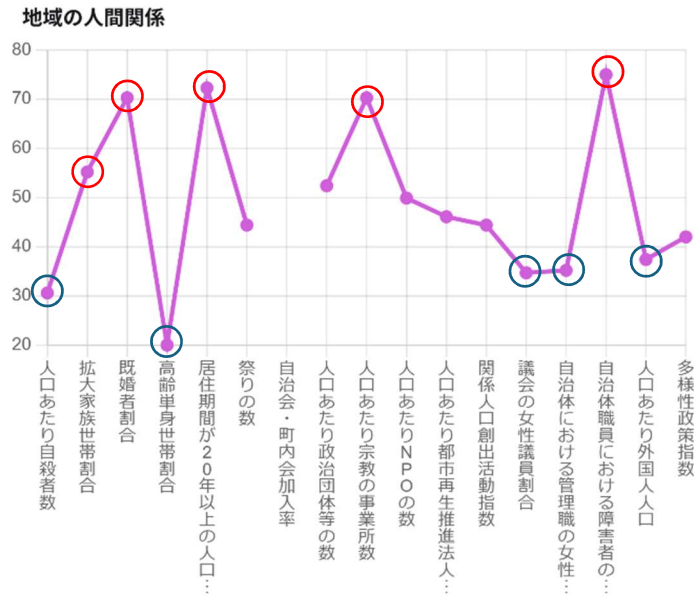
「地域の人間関係」のカテゴリーは、下図の赤枠に示す2カテゴリーである。



【出典】地域幸福度（Well-Being）指標活用ガイドブック（2024年12月 デジタル庁・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 2-14 地域の人間関係のカテゴリー

(1) 客観データ（オープンデータ）



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

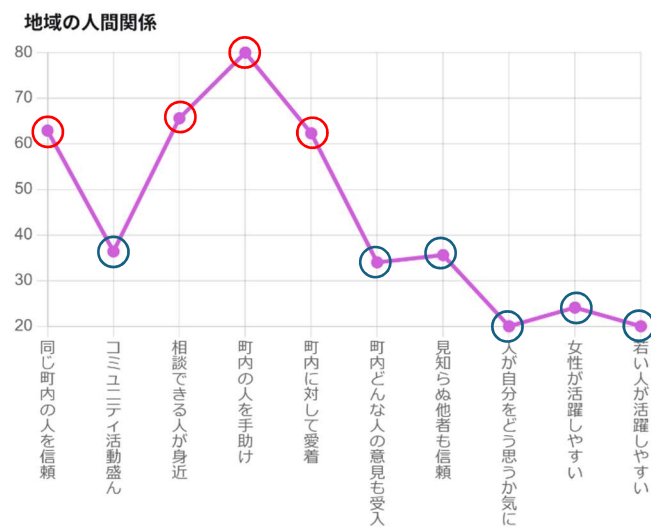
図 2-15 地域の人間関係 客観データ

表 2-4 地域の人間関係＞客観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった5項目		偏差値が特に低かった5項目	
	指標	偏差値	指標	偏差値
1	自治体職員における障害者の割合（多様性と寛容性）	75.0	高齢単身世帯割合（地域とのつながり）	20.0
2	居住期間が20年以上の人口割合（地域とのつながり）	72.3	人口あたり自殺者数（地域とのつながり）	30.6
3	既婚者割合（地域とのつながり）	70.3	議会の女性議員割合（多様性と寛容性）	34.7

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値	指標	偏差値
4	人口あたり宗教の事業所数 (地域とのつながり)	70.3	自治体における管理職の女性 割合 (多様性と寛容性)	35.2
5	拡大家族世帯割合 (地域との つながり)	55.2	人口あたり外国人人口 (多様 性と寛容性)	37.4

(2) 主観データ (アンケート)



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-16 地域の人間関係 主観データ

表 2-5 地域の人間関係>主観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値 (実数)	指標	偏差値 (実数)
1	町内の人困っていたら手助けする (地域とのつながり)	80.0 (3.5)	私は、町内の人自分がどう思っているかが気になる (多様性と寛容性)	20.0 (2.2)
2	困ったときに相談できる人が身近にいる (地域とのつながり)	65.6 (2.9)	若い人が活躍しやすい (多様性と寛容性)	20.0 (2.2)
3	私は同じ町内に住む人たちを信頼している (地域とのつながり)	62.9 (3.3)	女性が活躍しやすい (多様性と寛容性)	24.1 (2.4)
4	このまちに愛着を持っている (地域とのつながり)	62.3 (3.3)	町内にはどんな人の意見でも受け入れる雰囲気がある (多様性と寛容性)	34.0 (2.6)

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値 (実数)	指標	偏差値 (実数)
5			私は見知らぬ他者であっても信頼する（多様性と寛容性）	35.6 (2.3)
6			地域活動（コミュニティ活動 自治会・地域行事・防災活動等）への市民参加が盛んである（地域とのつながり）	36.4 (2.8)

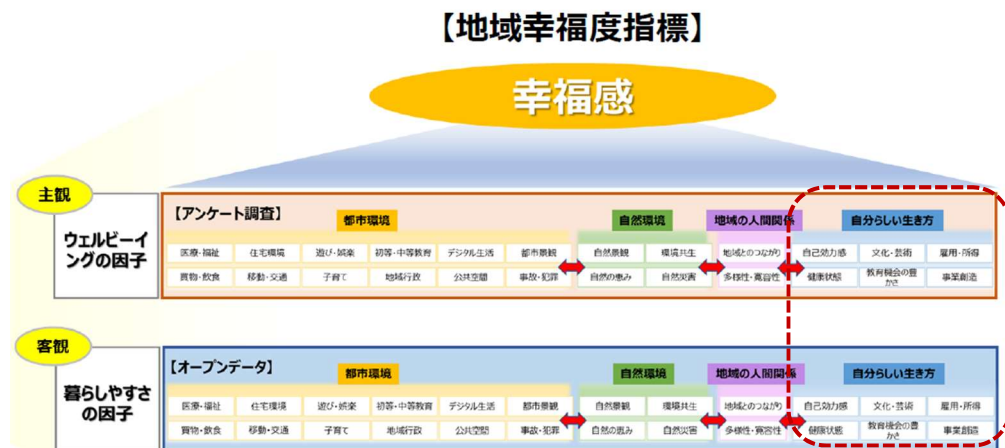
(3) 主観・客観データ分析

表 2-6 地域の人間関係>主観・客観データ分析

No	因子	分析
1	地域とのつながり	【主観】は「地域活動（コミュニティ活動自治会・地域行事・防災活動等）への市民参加が盛んである」が 36.4 とやや低い以外は、「町内の人が困っていたら手助けする」(80.0)、「困ったときに相談できる人が身近にいる」(65.6)、「私は同じ町内に住む人たちを信頼している」(62.9)、「このまちに愛着を持っている」(62.3) といずれも高い値を示している。 【客観】において、地域の人との交流する機会を表す「自治会・町内会加入率」は 2024 年度では値が示されていなかったが、2025 年度では 66.2 と高い水準にあった。また、孤独を感じる人が少ないかを示す「居住期間が 20 年以上の人口割合」(72.3)、「既婚者割合」(70.3)、「拡大家族世帯割合」(55.2) は高い水準にある一方、「高齢単身世帯割合」(20.0)、「人口あたり自殺者数」(30.6) と非常に低い水準にあり、一部の世帯では孤立のリスクも見られるため、地域でのつながりづくりが引き続き重要となる。
2	多様性・寛容性	【主観】は総じて低く、【客観】においても「自治体職員における障害者の割合」(75.0) 以外は、「議会の女性議員割合」(34.7)、「自治体における管理職の女性割合」(35.2)、「人口あたり外国人人口」(37.4) と低く、多様性の面では、今後の取り組みが期待される。

2.6. 自分らしい生き方

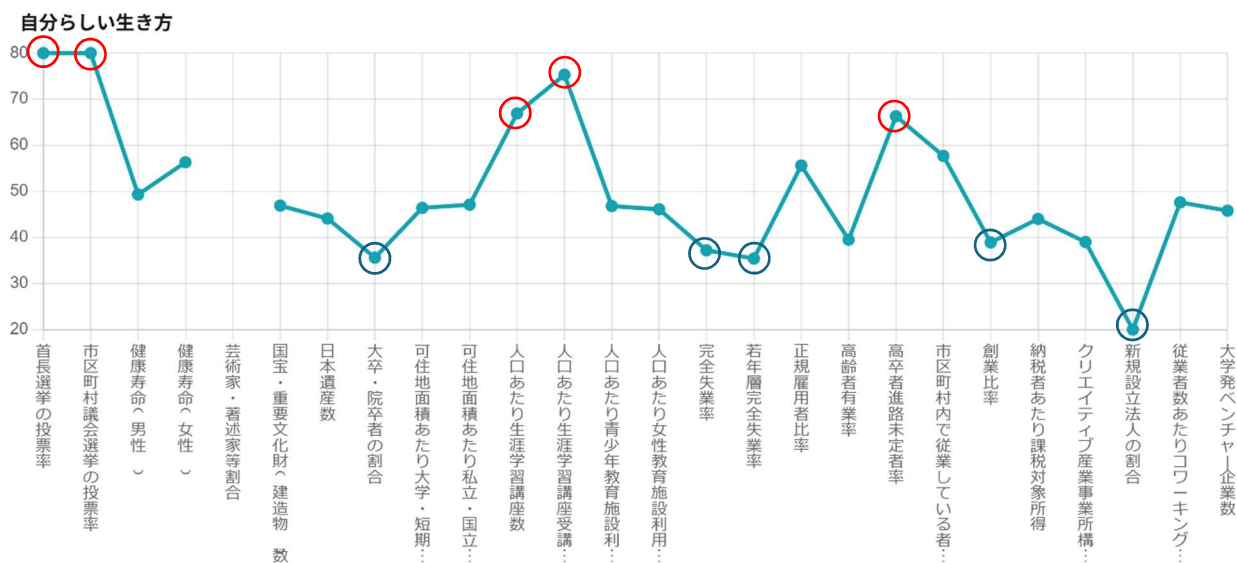
「自分らしい生き方」のカテゴリーは、下図の赤枠に示す6カテゴリーである。



【出典】地域幸福度（Well-Being）指標活用ガイドブック（2024年12月 デジタル庁・一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 2-17 自分らしい生き方のカテゴリー

(1) 客観データ（オープンデータ）



【出典】2024年度版（令和6年度版）Well-Being 個別調査

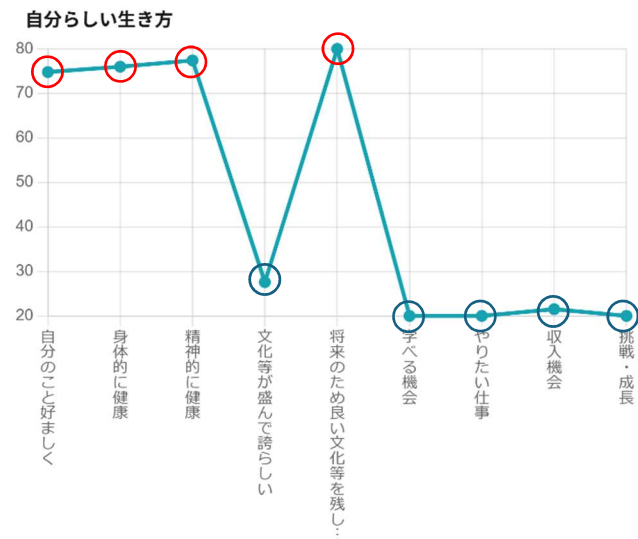
図 2-18 自分らしい生き方 客観データ

表 2-7 自分らしい生き方>客観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった5項目		偏差値が特に低かった5項目	
	指標	偏差値	指標	偏差値
1	首長選挙の投票率（自己効力感）	80.0	新規設立法人の割合（事業創出）	20.0
2	市区町村議会選挙の投票率（自己効力感）	80.0	若年層完全失業率（雇用・所得）	35.4
3	人口あたり生涯学習講座受講者数（教育機会の豊かさ）	75.6	大卒・院卒者の割合（教育機会の豊かさ）	35.6

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値	指標	偏差値
4	人口あたり生涯学習講座数 (教育機会の豊かさ)	66.9	完全失業率 (雇用・所得)	37.2
5	高卒者進路未定者率 (雇用・所得)	66.3	創業比率 (雇用・所得)	38.9

(2) 主観データ (アンケート)



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-19 自分らしい生き方 主観データ

表 2-8 自分らしい生き方>主観データ 偏差値トップ5・ボトム5

No	偏差値が特に高かった 5 項目		偏差値が特に低かった 5 項目	
	指標	偏差値 (実数)	指標	偏差値 (実数)
1	将来生まれてくる世代のために、良い環境や文化を残したい (文化・芸術)	80.0 (4.0)	学びたいことを学べる機会がある (教育機会の豊かさ)	20.0 (2.3)
2	精神的に健康な状態である (健康状態)	77.4 (3.6)	やりたい仕事を見つけやすい (雇用・所得)	20.0 (1.9)
3	身体的に健康な状態である (健康状態)	76.0 (3.5)	新たなことに挑戦・成長するための機会がある (事業創造)	20.0 (2.1)
4	自分のことを好ましく感じる (自己効力感)	74.8 (3.3)	適切な収入を得るための機会がある (雇用・所得)	21.5 (2.2)
5			文化・芸術・芸能が盛んで誇らしい (文化・芸術)	27.6 (2.3)

(3) 主観・客観データ分析

表 2-9 自分らしい生き方>主観・客観データ分析

No	因子	分析
1	自己効力感	【主観】の「自分のことを好ましく感じる」(74.8)の偏差値は非常に高い。【客観】「首長選挙の投票率」(80.0)、「市区町村議会選挙の投票率」(80.0)の偏差値も非常に高く、選挙を通じて、自分の意思を社会に反映することができていると言える。(ただし、投票率だけでは、主観・客観のぴったりの組合せが技術的に難しいとの観点から、2025年度より「転入超過割合」(41.5)、「完全失業者数」(39.3)が追加された。)
2	健康状態	【客観】市民の「健康寿命」の偏差値は男性 49.3、女性 56.3 と標準程度である一方、【主観】の「精神的に健康」(77.4)、「身体的に健康」(76.0)と市民の健康の実感が高くなっている。
3	文化・芸術	【客観】の文化財が多く存在するかを表す「国宝・重要文化財の数」(46.9)や「日本遺産の数」(44.1)と標準より低く、【主観】の「文化・芸術・芸能が盛んで誇らしい」(27.6)も低くなっている。一方、「将来生まれてくる世代のために、良い環境や文化を残したい」は 80.0 と非常に高い。市民の文化への意識は高く、今後の地域資源の活用が期待される。
4	教育機会の豊かさ	【客観】「大卒・院卒者の割合」(35.6)をはじめ、「可住地面積 100km ² あたりの大学・短大の数」(46.4)、「可住地面積あたり国立・私立中高一貫校数」(47.1)と学校教育の選択肢が多いとは言えず、【主観】の「学びたいことを学べる機会がある」も 20.0 と非常に低くなっている。一方、「人口あたり生涯学習講座受講者数」(75.3)、「人口あたり生涯学習講座数」(66.9)と高く、地域での学びの機会はあるが、進学や専門教育の選択肢には改善の余地がある。
5	雇用・所得	【主観】の「やりたい仕事を見つけやすい」は 20.0 と非常に低く、【客観】の十分な雇用機会があるかを示す「若年層完全失業率」(35.4)、「完全失業率」(37.2)、「創業比率」(38.9)が低いことからその傾向が伺える。また、【主観】の「適切な収入を得るための機会がある」(21.5)も非常に低い。適切な水準の所得が得られるかを示す【客観】の「納税者あたり課税対象所得」は 44.0 と全国標準よりやや低い水準ではあるものの、市民の実感としてはそれ以上に厳しく感じられている。
6	事業創造	【主観】の「新たなことに挑戦・成長するための機会がある」は 20.0 と非常に低く、【客観】のスタートアップが振興する環境があることを示す「新規設立法人の割合」も 20.0 と非常に低い値を示している。

2.7. 主観・客観散布図

主観指標、客観指標について、縦軸は主観指標の偏差値、横軸は客観指標の偏差値、偏差値 50（全国平均）で区切り整理すると、一般的には、右上の象限（主観と客観の偏差値 50 以上（全国平均以上））は都市の強み、左下の象限（主観と客観の偏差値 50 未満（全国平均未満））は都市の課題、左上の象限（主観 50 以上、客観 50 未満）は、住民は強いと思っている（主観）が客観的にはそうでもない因子、右下の象限（主観 50 未満、客観 50 以上）は、客観的には強いが、住民が気づいていない因子と分類できる。

	〒（脅威）	○（機会）
S （強み）	（主観50以上、客観50未満を記載） 市民は強いと思っているが、客観的にはそうでもない ⇒ やがて劣化していくことが予想される	（主観と客観の偏差値50以上を記載） 強み
W （弱み）	（主観と客観の偏差値50未満を記載） 課題	（主観50未満、客観50以上を記載） 客観的には強いが、市民が気づいていない ⇒ 知らしめることにより認識が変わる可能性がある

図 2-20 主観×客観分析

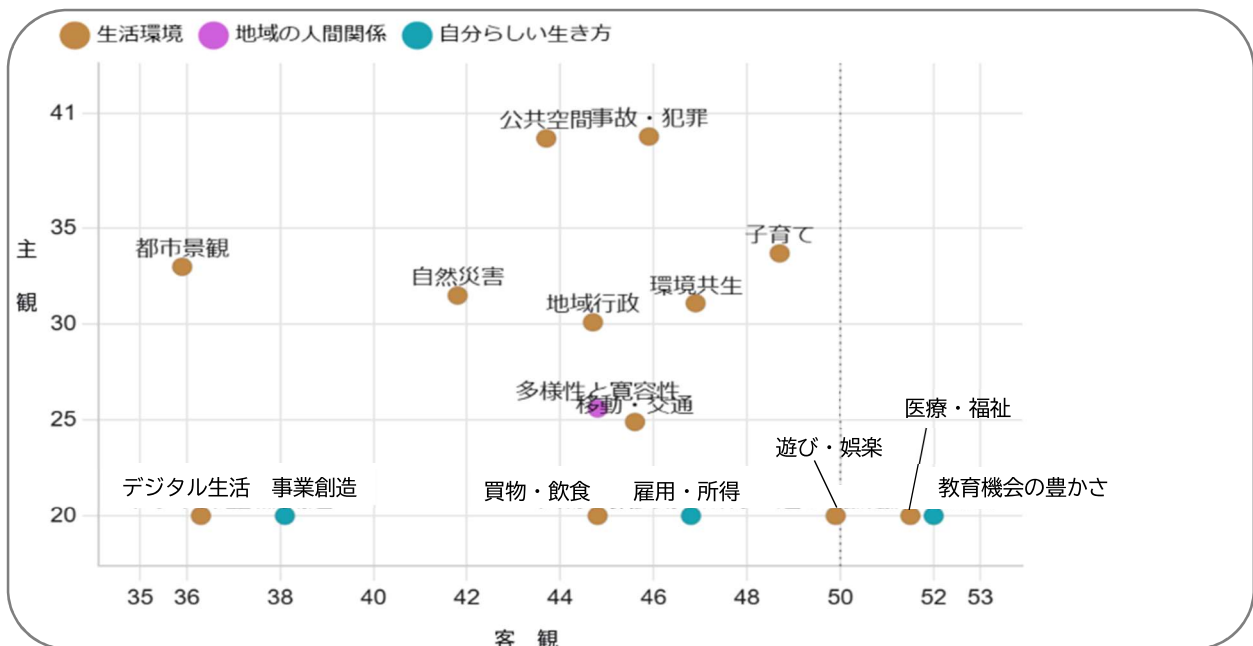
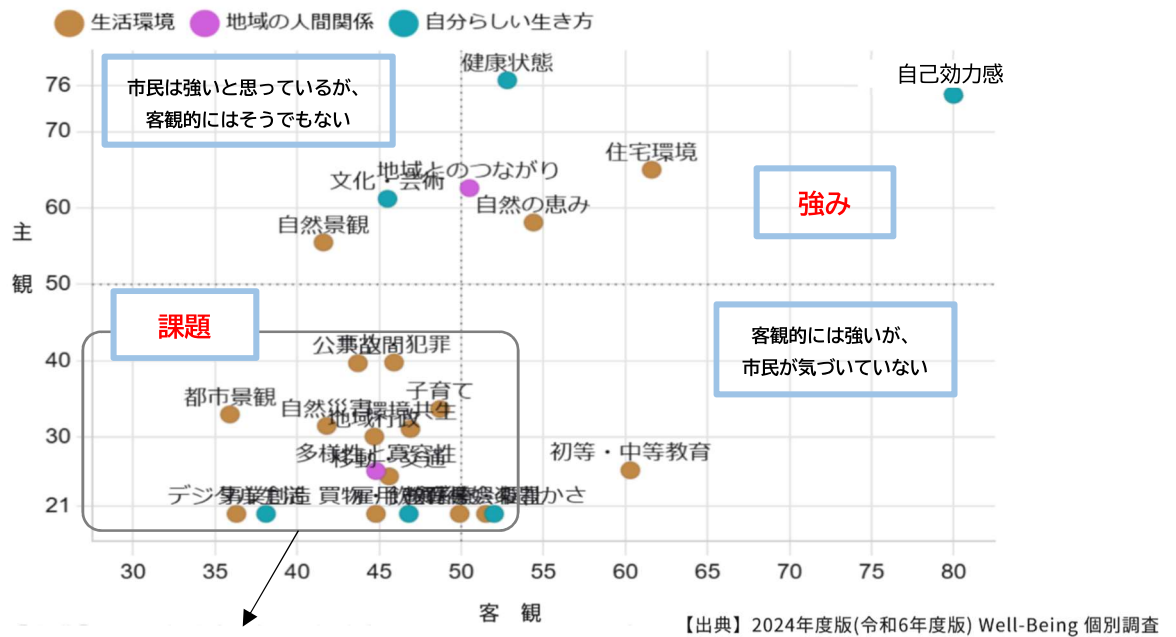


図 2-21 主観・客観散布図

主観・客観散布図から、以下のことが読み取れる。

(主観と客観の偏差値 50 以上 (全国平均以上))

- ・ 客観・主観ともに「住宅環境」「自然の恵み」「地域とのつながり」「健康状態」「自己効力感」の偏差値が 50 以上であり、津久見市の強みと考えられる。

(主観 50 以上、客観 50 未満)

- ・ 「自然景観」「文化・芸術」は、市民は強いと思っているが、客観データには表れていない。

- ・ これは「住民は強いと思っている（主観）が客観的にはそうでもない」という解釈ではなく、客観データ（自然景観指数：国立公園等の有無・重要文化的景観など）が実態を十分に表していると言えないケースに該当すると考えられる。

（主観 50 未満、客観 50 以上）

- ・ 「初等・中等教育」の客観の偏差値は高い（60.3）が、主観が低く（25.7）ギャップが大きい。
- ・ 「医療・福祉」「教育機会の豊かさ」についても、客観的には偏差値 50 を超えており低くはないが、主観が 20 と市民の評価が非常に低い。

（主観と客観の偏差値 50 未満（全国平均未満））

- ・ 客観 50 未満、かつ最小値である 20 の偏差値となっている主観の因子が多く（「買物・飲食」「遊び・娯楽」「デジタル生活」「雇用・所得」「事業創造」）、津久見市の課題と考えられる範囲に因子が多く集まる結果となった。

2.8. 相関係数

幸福度や生活満足度と、他の指標等との相関を以下に示す。

※ 相関係数

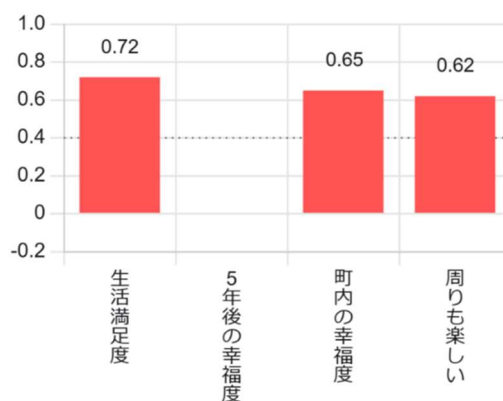
相関係数とは、2つのデータの間の「関係性の強さ」を表す値で、-1 から 1 の間の値で表現される。0 から離れている方がより強い相関関係を意味する。

<相関係数の目安（正の相関の時）>

- 0.7 以上：相関が非常に強い
- 0.4～0.7：相関が強い
- 0.4 未満：相関が弱い

(1) 幸福度と他の総合指標との相関係数

「幸福度」と他の総合指標「生活満足度」「町内の幸福度」「周りも楽しい」との相関係数は、全ての指標において 0.4 を上回り、幸福度と相関があるといえる。特に「生活満足度」は 0.72 に達しており、非常に相関が強い。



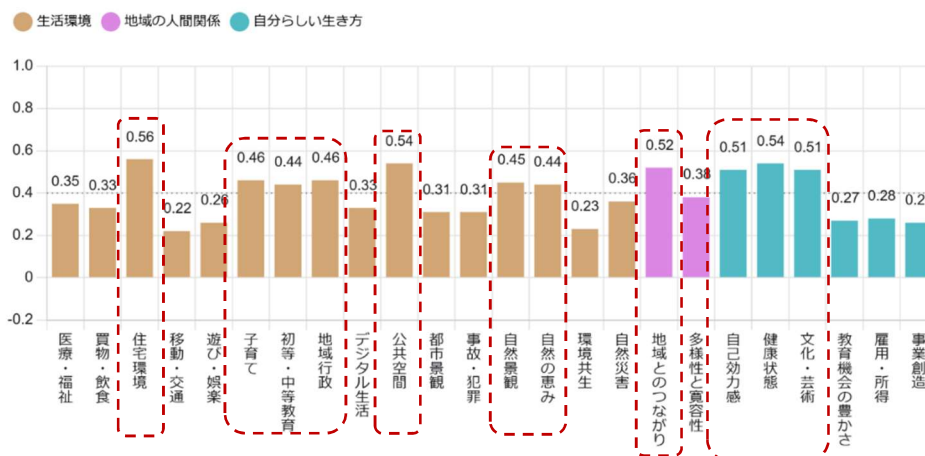
【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-22 幸福度と他の総合指標との相関係数

(2) 幸福度と因子との相関係数

幸福度と主観の 24 の因子において、ある程度相関があるといえる 0.4 以上の因子は、11 因子あり、「住宅環境」(0.56)、「公共空間」(0.54)、「健康状態」(0.54)、「地域とのつながり」(0.52)の順に相関が高い結果となっている。

この相関係数は、幸福度と各因子の相関をみているだけであり、因果関係を示したものではない点に注意が必要である。しかし、住宅や公共空間の心地よさ、心身ともに健康であること、地域とのつながりがあること等が、市民の Well-Being 向上に寄与する可能性があると読み取れる。

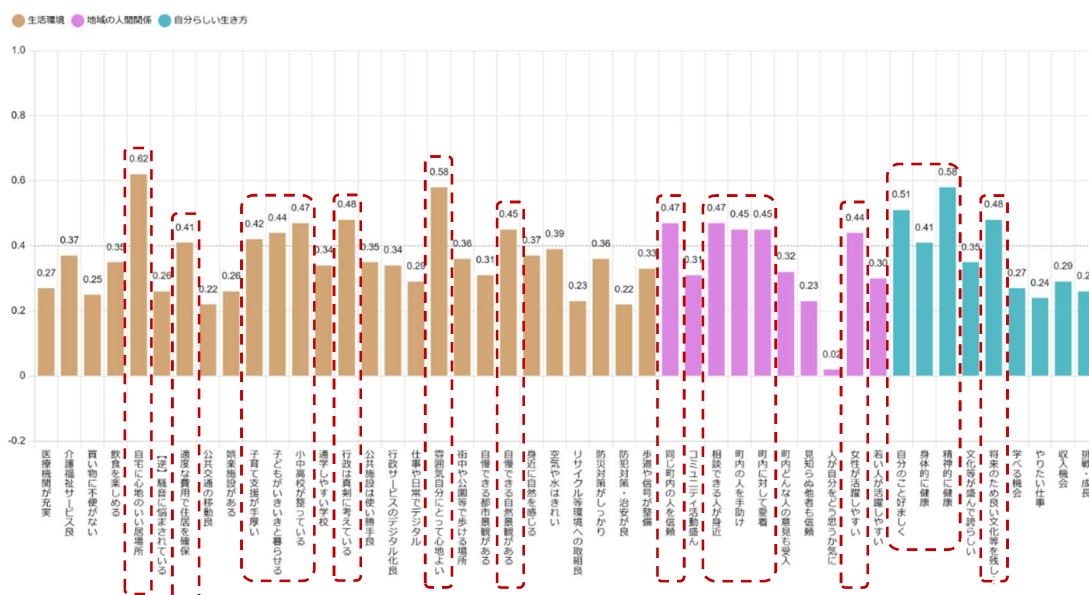


【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-23 幸福度と因子との相関係数

(3) 幸福度と KPI との相関係数

幸福度と主観の 46 個の KPI において、ある程度相関があるといえる 0.4 以上の因子は、17 個あり、「住宅環境」因子の「自宅には心地良い居場所がある」(0.62)、「公共空間」因子の「地域の雰囲気は、自分にとって心地よい」(0.58)、「健康状態」因子の「精神的に健康な状態である」(0.58) が、特に相関が高い結果となっている。

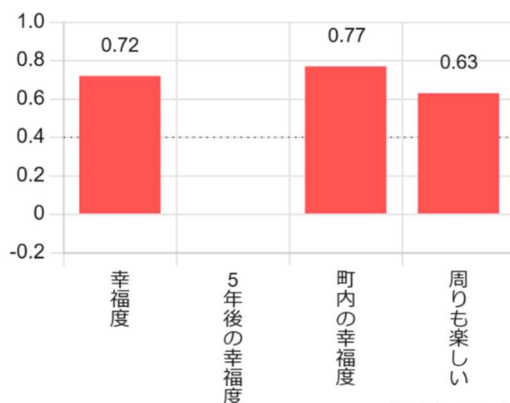


【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-24 幸福度と KPI との相関係数

(4) 生活満足度と他の総合指標との相関係数

「生活満足度」と他の総合指標「幸福度」「町内の幸福度」「周りも楽しい」との相関係数は、「生活満足度」「町内の幸福度」「周りも楽しい」の全ての指標において 0.4 を上回り、相関があるといえる。特に「生活満足度」「町内の幸福度」は 0.7 を超えており、非常に相関が強い。



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

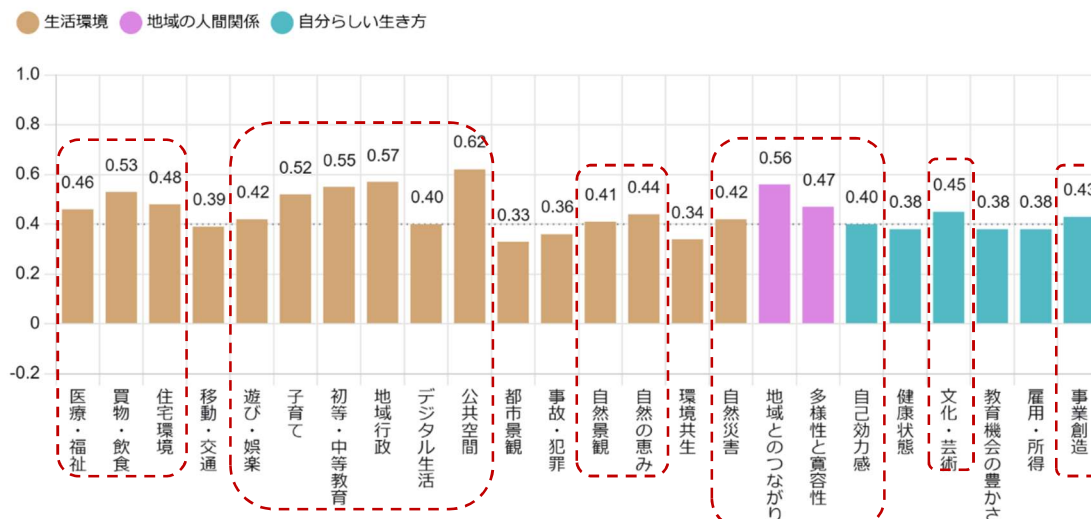
図 2-25 生活満足度と他の総合指標との相関係数

(5) 生活満足度と因子との相関係数

生活満足度と主観の 24 の因子において、ある程度相関があるといえる 0.4 以上の因子は、17 因子あり、「公共空間」(0.62)、「地域行政」(0.57)、「地域とのつながり」(0.56) の順に相関が高い結果となっている。幸福度と同様、公共空間の心地よさ、地域とのつながりがあること等が、市民の生活満足度の向上に寄与する可能性があると考えられる。

一方、「健康状態」(0.38) は、幸福度とは相関があったが生活満足度との相関は見られなかった。また幸福度では相関が見られなかったが生活満足度では相関があった因子として「買物・飲食」(0.53) があげられる。

これは、幸福度と生活満足度は、相関が高く、概念的にも近いものであるが、生活満足度は、「公共空間」、「地域行政」、「買物・飲食」等、日常の暮らしでの満足度を表し、幸福度を得るための要因でもあるということに対し、幸福度は、「健康状態」や「自己効力感」等、個人感情的な要因との結びつきの傾向が強く、最終的に目指すべき項目であるというように考えられる。



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-26 生活満足度と因子との相関係数

全国的にも、幸福度と「健康状態」や「自己効力感」といった「自分らしい生き方」の因子、生活満足度と「公共空間」や「地域行政」といった「都市環境」の因子との相関性が高い結果となっている。

幸福度、生活満足度、町内の幸福度に相関性の高い主観因子トップ10。共通項は、公共空間、教育機会の豊かさ、事故・犯罪、地域行政の4因子（下線）

【幸福度】	【生活満足度】	【町内の幸福度】
1. 健康状態*	1. 公共空間*	1. 公共空間*
2. 自己効力感*	2. 地域行政*	2. 教育機会の豊かさ
3. 公共空間*	3. 教育機会の豊かさ	3. 事故・犯罪
4. 文化・芸術	4. 事故・犯罪	4. 文化・芸術
5. 地域とのつながり*	5. 事業創造	5. 多様性・寛容性
6. 教育機会の豊かさ	6. 雇用・所得*	6. 子育て
7. 事故・犯罪	7. 初等・中等教育	7. 地域行政
8. 多様性・寛容性	8. デジタル生活	8. 自己効力感*
9. 地域行政	9. 子育て	9. 事業創造
10. 都市景観	10. 医療・福祉*	10. 初等・中等教育

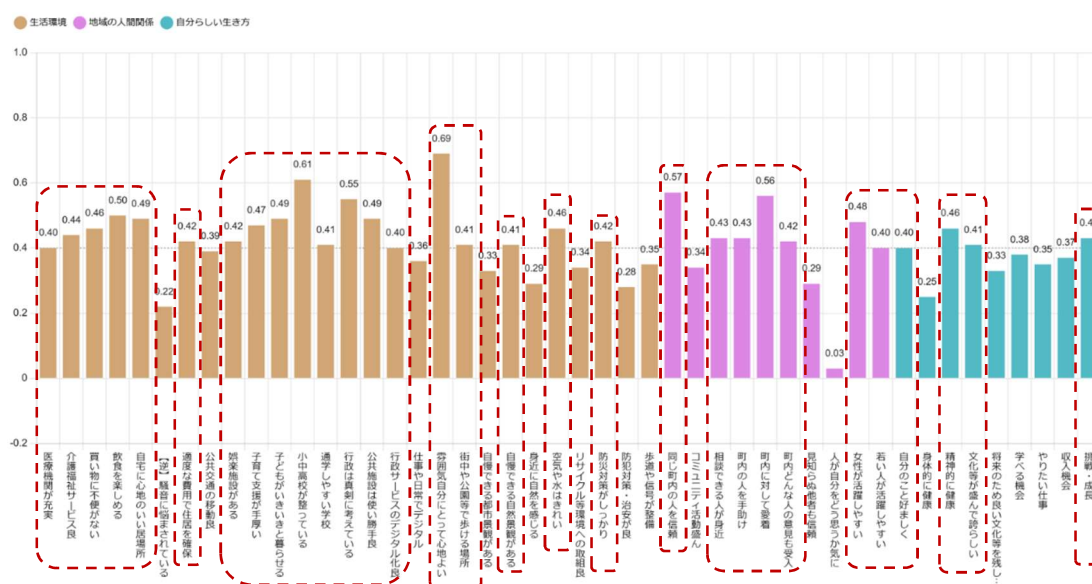
都市環境の設備
自然環境の設備
地域の人間関係の設備
自分らしい生き方の設備
（※重回帰分析で抽出できた因子）

（出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート）

図 2-27 全国 幸福度・生活満足度と相関性の高い主観因子

（6）生活満足度と KPI との相関係数

生活満足度と主観の 46 個の KPI において、ある程度相関があるといえる 0.4 以上の因子は、30 個あり、幸福度より相関の高い KPI が多くなっている。特に、「公共空間」因子の「地域の雰囲気は、自分にとって心地よい」（0.69）、「初等・中等教育」因子の「教育環境（小中高校）が整っている」（0.61）、「地域とのつながり」因子の「同じ町内に住む人たちを信頼している」（0.57）、「このまちに愛着を持っている」（0.56）が、特に相関が高い結果となっている。



【出典】2024年度版(令和6年度版) Well-Being 個別調査

図 2-28 生活満足度と KPI との相関係数